

◆連載

いま留萌むかし 第二話

●留萌港の生みの親C・S・メーク

C・S・メーク彼は留萌の人たちにとって忘れることのない外国人であるとともに北海道の港湾関係者にとってもその歴史の中で燦然と光を放っている。彼は北海道の港湾の生みの親と言っても過言ではない存在なのである。

福山、寿都、瀬棚でほぼ全道の港湾調査と築港設計を行っている。彼の調査設計は総てが実施に移されたわけではなく、以後の北海道の港湾行政の基礎的な資料となったのはいうまでもない。

真の設計図のとおりである。この計画どおりには実現されなかったが、将来の留萌港の基礎となったことは言うまでもない。彼の設計は留萌川は切り替えずにそのままその河口を利用するといふものであった。設計見積は百二十八万八千ドルで、その主な施設は西防波堤、内港東防波堤、内港東防波堤、河口突堤、岸壁であり、河口は俊ちようによって水深を確保しようといふものであった。

彼はいわゆる草創期の北海道庁に招へいされた御雇外国人の一人であった。明治二十年（一八八七）北海道庁に招かれ明治二十三年（一八九〇）に満期解約となっている。

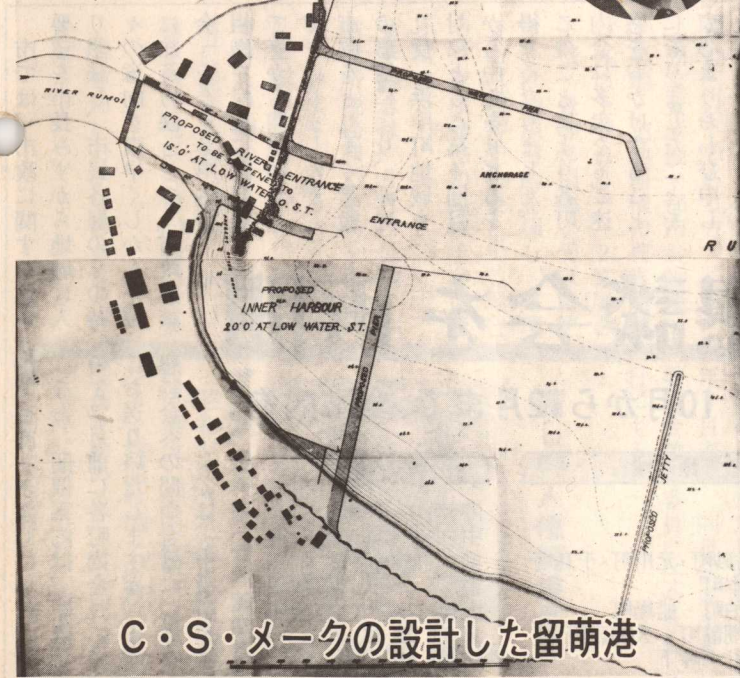
彼のこの報告書が留萌の運命を変えたといつても過言ではない。彼の報告書から留萌に関する記事を抜粋してみよう。「私は西海岸にやってきた。すでに参考資料で知っていたとおり天塩沿岸で唯一の港らしい大きな港があることを知った。その留萌が自然に恵まれた優位な位置と交通上の位置から考えても非常に有望な場所であり、私が最初に報告書で指摘したとおり、天塩と石狩の間で商港としての条件を備えているのは留萌に匹敵する場所はないと強調した

「私は西海岸にやってきた。すでに参考資料で知っていたとおり天塩沿岸で唯一の港らしい大きな港があることを知った。その留萌が自然に恵まれた優位な位置と交通上の位置から考えても非常に有望な場所であり、私が最初に報告書で指摘したとおり、天塩と石狩の間で商港としての条件を備えているのは留萌に匹敵する場所はないと強調した

僅か三年間の滞道中に道庁技師福士成豊、同技手三上源蔵らとともに北海道の港湾調査を行い、明治二十年十一月その成果を「北海道港湾調査報告書」として初代北海道庁長官岩村通俊に提出している。彼の調査した港湾は浦河、根室、花咲、釧路、厚岸、浜中、網走、佐呂間、留萌、増毛、石狩河口、江差、函館、室蘭、砂原、森、小樽、岩内、熊石、

「私は西海岸にやってきた。すでに参考資料で知っていたとおり天塩沿岸で唯一の港らしい大きな港があることを知った。その留萌が自然に恵まれた優位な位置と交通上の位置から考えても非常に有望な場所であり、私が最初に報告書で指摘したとおり、天塩と石狩の間で商港としての条件を備えているのは留萌に匹敵する場所はないと強調した

「私は西海岸にやってきた。すでに参考資料で知っていたとおり天塩沿岸で唯一の港らしい大きな港があることを知った。その留萌が自然に恵まれた優位な位置と交通上の位置から考えても非常に有望な場所であり、私が最初に報告書で指摘したとおり、天塩と石狩の間で商港としての条件を備えているのは留萌に匹敵する場所はないと強調した



C・S・メークの設計した留萌港

ドンに生まれた。チャールズ・スコット・メークが正式な名前である。一八七〇年十七才で職人としての彼の人生が始まる。三十才でシャープ技師のもとで河岸改良工事などの助手をし、そのあとトーマス卿のもとで鉄道、橋の設計測量の仕事をした。二十九才で港湾関係の設計、構築をするメッセージ商会へ入社。一八八七年三十四才のとき、日本

政府港湾河川技師長として日本に招へいされた。彼の人生で一番脂の乗り切った時期を日本でもそれも開発の始まったばかりの北海道で仕事をしたのである。一八九〇年日本での仕事を終え帰国した。その後も港湾、ドッグなどの設計をてがげ、特に南ウオーレスのタルボット港の築港が有名である。一九二三年死去、享年七十才であった。

るもい

●特集子どもたちの健康を守り育てる学校給食。

昭和63年10月発行・留萌市編集・企画・振興・監査・印刷・白鷺印刷株式会社

1988